

〈書評〉

野谷文昭・旦敬介編著

『ラテンアメリカ文学案内』

(冬樹社, 1984年)

ラテンアメリカの文学に対する関心が、近年わが国でも急速に高まってきたことは周知の通りである。欧米諸国の文学作品と比較すればその数はまだまだ微々たるものであるとは言え、ここ十年ばかりの間に翻訳刊行されたこの亜大陸の文学作品、とりわけ小説の数は飛躍的な増加ぶりを示している。しかも、大部分がガルシア＝マルケス、フエンテス、バルガス＝ジョサなどを中心とする現代作家のもので占められていることから見ても、ラテンアメリカの現代文学が魅力的な存在となったことの何よりの証拠と言える。しかし、中南米の文学がわが国で今日のように親しまれるようになったのは、ただその質的な向上によるだけではなく、様々な要因が重なり合った結果であることは明白である。これについては、すでに色々な文芸雑誌や新聞などで指摘されているが、まず、欧米の文化人たちがキューバ革命を契機としてこの国の文化、特に文学に関心を寄せ、やがて広くラテンアメリカの文学にも注目するようになったことがその一つと考えられている。その他に、新しい読者層を獲得しようとする欧米の出版業界の努力も要因として挙げられている。わが国の場合、ヨーロッパのこうした事情の反映を否定し去ることは困難であろう。いわゆるラテンアメリカ文学の「ブーム」が起る以前から、すでに亜大陸には優れた作家や詩人がいたわけであり、また、少数の専門家たちの間ではあるがその価値が認められていたことはまぎれもない事実である。わが国の場合、近年ラテンアメリカの言語に親しむ人びとの数が著しく上昇し、従ってこうした地域の歴史や文化一般に興味を抱く人がふえてきたことが、今日の状況をもたらした背景となっている。文学研究においても同じ現象がうかがえる。長い間、わが国の大学にはこの地域の文学の研究者を養成する機関に恵まれていなかったが、ここ10年

余りの間に事情はかなり変わってきた。研究施設の増加と相俟って研究者の数も次第にふえてきた。それまでラテンアメリカ文学の紹介は——スペインやポルトガルの文学についても同様のことが言えるのであるが——語学の専門家の手になることが多かったし、しかも作品そのものの翻訳にとどまる場合がほとんどで、いわゆる研究となると、とかくおろそかにされがちだった。あるいはイベリア半島の言語圏の外にある文学者がその役を引き受ける有様であった。このような事情を考えると、今日のように亜大陸の文学が紹介されるようになったことは喜ばしい限りである。今後、研究、紹介が進むにつれて、現代文学のみならず今世紀初頭の、更には19世紀の、いや植民地時代の文学にまで手がつけられる日が来ることは間違いないだろう。しかもそのような日はそう遠い将来ではないように思われる。

作品そのものの翻訳と並行して、解説書の類も続々と刊行されてゆく傾向にあるが、これはけだし当然のことと言える。広大な亜大陸の、20ヵ国に近い国々の文学には、共通点はもちろんあるが、それぞれ特殊性があることは言うまでもない。巨象の真の姿を耳や鼻だけで言い当てることの危険性は誰も知っている。そこに適切な解説書の必要性が生じるわけである。ところでこの重要な役割を演じてきたものとして『ユリイカ』、『カイエ』、『海』、『すばる』、『文藝』、『現代詩手帖』などの文芸雑誌があるが、一方、単行本としてはピコン＝サラスの『ラテンアメリカ文化史——植民地時代』、J.フランコの『ラテンアメリカ——文化と文学』、J.ジョゼの『ラテンアメリカ文学史』などを挙げることができる。最初の著作は文化史という題名だが植民地時代の文学にも少なからぬ重点が置かれていて、エンリケス＝ウレーニャの『イスマノアメリカ文学思潮』(残念ながら邦訳はないが)と並ぶ、古典的な研究書である。一方、J.フランコの著作は19世紀末から現代にかけての亜大陸の社会と知識人とのかわりに重点を置いた解説書である。そしてJ.ジョゼの著作は純粋に文学史的な立場から、征服時代に始まり現代に至る文学の流れを系統的に解説したものである。これらの案内書に共通するものとして、1人の著者によるアカデミックな叙述を指摘することができるが、もう1つ特徴的なこととして、いず

れも外国人の書いたものである点を強調したい。これはこれから扱おうとする表題の『ラテンアメリカ文学案内』の特色を述べる上で極めて大切なことと考えられる。前置きが些か長くなることをも省ず敢えてこれらの著作を引用したのもそのためである。すなわち、この案内書が従来のような単なる翻訳に過ぎないのではなく、主としてわれわれ日本人の立場からわかりやすく書かれた実にユニークで、しかも楽しく読める、ひと味違った案内書となっている点を強調したかったわけである。

そこで、具体的に本書の特色について述べてみたい。先に挙げたユニークさを一言で言うならば、編者の柔軟な思考とアイデアの成果に他ならないと思われる多彩さである。本書の構成には様々な面で斬新な試みがなされていて、それが従来この種の解説書には見られなかった体裁と内容を備えさせている。その意味で、本書の表紙カバーにもあるように、もしラテンアメリカの現代文学が絢爛たる混沌であるとするなら、本書の体裁こそ、まことにそれについて述べるにふさわしいものと言えるであろう。体裁に見られる多彩ぶりをもっと詳しく述べれば、先ず、色刷りのページが、しかも何種類かに刷り分けられて、豊富にまくばられたイラストや写真と組み合わせあって、まさしくフィエスタの雰囲気をかもし出している。いかにもモダンと言うか当世風で若者好みのこうした構成は、もしかして編著者の世代と無関係ではないかも知れない。文学の祭典を盛り上げるにふさわしいこの試みも、一方では活字の小ささもあってカラーページの解説文が多少とも読みずらくなっているのは惜しい。次に、本書の特色として執筆者の多彩な顔ぶれを挙げることができる。少なくとも20人を下らない人たちが本書の企画に加わっているのである。彼らの中にはラテンアメリカ文学の専門家はもちろんだが、その他に文化人類学者、ジャズ評論家、華道家、英文学者、イラストレーター、ジャーナリスト、スポーツ評論家、美術史家、小説家、映画評論家などさまざまな分野で活躍している人びとがいる。そして、それぞれの立場から、あるいはその立場を離れて、たとえばプロレス、漫画、食べ物、野球、音楽、絵画などについての、いずれも興味深いエッセイを寄せていて、とかく堅苦しくなりがちな文学論や作家論の合間に手際

よく配置されている。しかもそれらは一見文学とは無関係なテーマでありながら、実はラテンアメリカの文化や文学の背景を知る上で格好の読み物となっている。たとえば「キノのおののき」の中で落合一泰氏は、キノの漫画の表現方法の開拓を、ボルヘス、コルタサル、プイグなどはぐくんだアルゼンチン、とりわけブエノスアイレスの都市文化と関係づけているし、「匂いの地理学」で寿里順平氏は、中南米の国々の料理について語るとき、バルガス＝ジョサやガルシア＝マルケスの小説に登場する料理に言及することを忘れてはいない。また「野獣たちの最後の戦い」を書いた伊藤俊治氏は、アルゼンチン出身の往年のボクサーの姿を蘇らせた後、最後に、ボルヘスの「タンゴの歴史」の一節を引用している。河村要助氏の「サルサにお手あげ」も、80年代に入ってラテンアメリカ全域に広がったというサルサの歴史を辿る中で、この音楽が亜大陸の文化と生活の象徴としてすべての頂点に立っていることを教えてくれる。コラムの一つ一つについて述べるには余りにもその数が多いので省略するが、こうした読み物が本書のフィエスタ的な雰囲気彩りに彩りを添えている。ただ、ここで多少気になるのは、本書がもし一般の読者を対象として編まれているのなら、上げ足取りの謗りを覚悟で敢えて言わせてもらえば、スペイン語の字句の解釈に正確さが求められる。というのも、こうしたコラムのエッセイの中で時たま用いられるスペイン語の解釈のしかたがユニークで、それだけに面白く読ませるのだが、一方この外国語を全く知らない読者には誤って覚えられはしないかと気になるものがあるからである。たとえばプロレスを扱ったコラムでは「ルーチャ・リブレ（直訳すれば自由への闘いだがメキシコではプロレスをこう呼ぶ）……」とあるが、その意味のスペイン語ならルーチャ・ポル・ラ・リベルトである。ルーチャ・ドール達の」といったことばが2カ所ある他、ルーチャ・リブレの戦士（ドール）達というのもあって、比較的僅かな紙面であるだけに余計に目立たざるを得ない。原作者の文章を尊重する編著者の気持は当然であるが、この辺はやはりちょっとチェックが欲しかったように思われる。

本書を更に多彩なものにしているのが、「スクラップ・ビジュアル」である。

現代ラテンアメリカにおける生活の種々相を映像で浮き彫りにしたこのコラムは、暴力、宗教、スペクタクル、都市、人間、間——ヨーロッパ・アメリカ交通、の七つの項目に分れていて亜大陸の特色をなまなましく写し出している。よくもこれだけの写真が入手できたものだと、本書に注いだ編著者の意欲と情熱に感服させられる。情熱といえ、年表、索引、参考文献にもこれをうかがうことができるが、これについては後で述べることにして、「スクラップ・ビジュアル」に話を戻せば、全体的な印象として、キャプションにややオーバー気味なところがあり、一種のセンセーションリズムを感じるのは筆者だけだろうか。たとえば「独裁政権を肥やした鉄道によって革命が運ばれる」と言えば小気味よく響くが、それは交通機関の果す部分的な役割でしかないことは言うまでもないだろう。ラテンアメリカの諸都市のかかえる切実な交通問題もあるはずである。

本書のもう一つの特色は、取り扱われている項目の多様性もさることながら、それらの配列に見られる珍しさである。従来の文章法にこだわらない書き方、たとえば段落の始まりで一字下げをしない、詰めて書く方法などはまだ序の口である。全体が立体的な構成になっていて無数の読み方が可能なように考察されている。すなわち、同じページの上段と下段で別々な項目あるいは2つの論文が扱われていたり、ある項目を扱っている途中で他のコラムが介入するといった具合になっていて、さながら清濁併せ呑んで濤々と流れる大河の趣がある。異なったテーマの、しかも様々な長さの文章を同時進行の形で展開させる方法は、ページをあちこち飛ばし読みさせるコルタサルの小説『石蹴り遊び』の奇抜な手法を連想させる。フィエスタを盛り上げるためのこうした一連の奇抜な試みも時として手放しで感歎してばかりおれないことがある。たとえば、序文の意味での *intro* はいいが跋文の意味で *outro* と書くのは、インテリアに対する造語としてアウトエリアという言葉が市民権を得たかに見える今日とは言え、いかがなものであろうか。

ともあれ、本書の中核をなすものはやはり4編の翻訳物を含めた11編の論文である。ここでもまた多彩さをその特色として挙げることができるだろう。本

書の構成が重層的であるように、論文の内容も重層的である。これらの論文はラテンアメリカ文学の黎明期から現代に至るまでの歴史的経過を論じたもの始まり、地域的な文学に重点を置いたものや個々の作家について述べたもの、更にある特定の作品について論じたものまであって、豊富な情報を提供してくれる。もちろん、本書の帯に「21世紀の文学案内」とあるように、重点は現代文学にあり、従ってその他の時代の文学が副次的存在となっているのは当然である。翻訳論文について言えば、パスの「コスモポリタンの夢」が亜大陸の文学の特色を歴史的に辿れば、ロア＝バストスは「イメージの変容」の中で、ラテンアメリカ文学の展開における特質な社会的現実とのコミットメントという観点から論じ、J.フランコは「スーパースターの時代」の中で、大衆文化の時代のイスマノアメリカ文学について述べる際、ガルシア＝マルケス、バルガス＝ジョサ、コルタサル、フエンテスなどに共通する特色を挙げている。カルペンティエルの「21世紀を迎えるラテンアメリカ文学」は、付記にもあるように、1979年にイェール大学で行われた講演であるが、ここでも、19世紀末から現代に至るまでの文学史的側面が解説されている。これらの4編の作品はいずれも異なった視点からラテンアメリカの文学を眺めながらも、その特色を指摘する点では共通するものを持っている。読者はこれらの論文を読むだけでも、その間に登場する作家たちの名前やその代表作の名前を数多く知ることができる。ただ、やや重複の感なきにしもあらずだが時代の文学論がその時代の作家の名前も作品名を挙げることなしには成り立たず、また作家論もその時代や社会を無視しては成り立たない以上、複数の論文のもたらすこうした現象はある程度止むを得ないだろう。翻訳論文の題名はそのほとんどが原題とは異なったものになっているが、内容を適確に表現しようとするこの種の案内書では、むしろ当然と言うべきかも知れない。国内の研究家の執筆になる7編の論文も、それぞれに読みごたえのある、示唆に富んだものとなっている。レヴィ＝ストロースとの比較においてカルペンティエルの文学を論じた三浦氏の「歴史と原始」をはじめ、カブレラ＝インファンテとレサマ＝リマの作品を論じた富山太佳夫氏の「中心のない渦巻き」、バスやフエンテスに代表されるメキシコ文学

について書いた安藤哲行氏の「仮面の剝奪」、ガルシア＝マルケス論を展開する野谷文昭氏の「暗喩としての娼婦」、そしてバルガス＝ジョサの文学の本質に迫る山蔭孝夫氏の「インディヘニズモの影」、と言った具合に、題名を挙げてみればわかるように、作家論がその大半を占めている。且敬介氏の「記録する病とことばの爆破」と木村栄一氏の「反近代の文学」はもっと広がりをもった文学論となっている。こうした論文が互いに補完する形となって、ラテンアメリカ現代文学の全体像を作り上げているわけである。もっとも、周知のように、文学作品の解釈には様々な立場があり、且つその方法も千差万別であるが、中には筆者の一種の気負いが先行しているように思えなくもないものもある。もしも先般推測したように、対象とする読者が一般の人であるとするなら、ある事象に対する独特な解釈は興味深くとも、その影にひそむ事実を無視することになりはしないだろうか。たとえばアルゼンチンの文学を論じるとき、ブエノスアイレスにのみ代表されるし、地方的なものを一方的に否定するのはいかがなものであろうか。もちろん、ラテンアメリカ文学につねに見られる二律性を百も承知の上での論述ではあろうが、一般の読者には果してわかってもらえるだろうか。この種の「案内書」に論文形式で多くの人が執筆することのメリットは先にも述べた通りであるが、一方では、まかり間違えば編者の独断に陥る危険性もある。バルガス＝ジョサの文学をインディヘニズモのジャンル内で論じることには議論の余地がありそうである。

しかし今述べた事柄は決して本書の持つすばらしさを減ずるものではないし、いわんやその数々の長所を否定するものでもない。すべては周到に計算されたプランに従って、まことに「文学の祭典」という副題にふさわしい内容を盛りこむためのアイディアの産物なのである。読者はきっと、本書を読み進むにつれて、いつの間にか自分もそのフィエスタの一員になっているのを感じる事だろう。

最後に、特筆すべき事柄として、さきに少し触れた年表と索引と参考文献がある。年表はラテンアメリカ文学史、世界文学・思想史、社会・政治史の3つに分けて、征服時代以前の1300年代から本書の出版年に至るまでの主要な事項

を非常に要領よく作成されていて、しかも、たとえば文学作品の場合は小説か詩か戯曲か評論かが一目でわかるように親切に注記されている。索引も丹念になされていて、編著者のこの作品にかける熱意のほどがうかがえる。又、参考文献は作品(集)、特集雑誌、参考図書の3つに分類されていて、ラテンアメリカ文学の専門家にとっても極めて貴重な存在である。

吉田秀太郎 (大阪外国語大学)